

里地里山の保全・活用の取組における課題と技術的方策等

分類	持続可能な利用のための伝統的技術の保存、新たな利用技術の開発
手法名	有機農業によるバイオマス利用と地域内循環
主体	農事組合法人さんぶ野菜ネットワーク
背景(地域の課題)	農業分野においても食の安全安心と生物多様性の保全がクローズアップされてきている。自然資源を活用して取り組むことが可能な有機農業技術の開発と普及が求められている。
手法／方策の詳細	<p>農事組合法人(以下(農))さんぶ野菜ネットワークでは、農業者の自主的活動から始まった環境に負荷を与えない循環型の農業の取り組みとして92haの登録面積で45haのJAS有機認証、45haの特別栽培を行ってきた。また在来種の保存など生物多様性保全の点でも着目される活動をはじめている。</p> <p>生物多様性保全や地域の物質循環を作っていく有機農業の試みとして、地域にあるバイオマスを利用した土壌改良や畜産を介した堆肥化手法等の開発に取り組んでいる。</p> <p>1) 土壌改良への利用 地元さんぶ杉による炭を農業の土壌改良に使用している。化学物質に頼らない土づくりを目指す有機農業の姿勢に合致する利用方法となっている。</p> <p>2) 畜産への利用 炭を豚の飼料に加えることで、肉質の改善や排泄物の堆肥化を試みている。良い作物をつくるためには必要な微生物菌のすみかが確保されることが重要であり、炭は微生物のすみかになるため、効果が期待されている。</p> <p>3) 有機農業の取り組み ①病害虫管理 : IPM農法(※1)の実践 物理的防除(被覆資材の使用:ネット等)、天敵利用(バンカープランツ)、フェロモン剤の使用、黄や青の粘着板の使用、黄色蛍光灯の使用、太陽熱消毒技術の導入、輪作体系へのマリーゴールド等のセンチュウ対抗作物導入など、化学物質に頼らない防除方法を工夫している。</p> <p>②施肥等 100%有機配合肥料による全面全層施肥の他、溝施肥やベッド施肥(※2)を併用している。植物主体の堆肥を使用を心がけており、動物性の堆肥においても近隣の畜産農家2軒(豚・牛)と提携し利用することで地域循環型の農業を目指している。また緑肥作物の作付による輪作体系の継続化も図っている。</p> <p>※1 IPM(Integrated Pest Management) : 総合的病害虫群管理。天敵などを有効利用し、農薬散布回数を減らす総合的害虫管理のこと。 ※2 種子をまく場所(床)や苗を植えつける畝に、集中的に施肥する方法施肥量を節約することができる。</p>
手法・技術的視点	有機農業に、地域内物質循環を取り入れることで、地域内の生物多様性と里地里山保全活用が図られる。さらに、バイオマス活用との連携など地域資源の循環を取り入れ、複層的な取り組みとすることが可能になる点に着目。

◆写真から

1. 被覆資材:サンサンネット (有害虫の侵入の抑制効果)
2. 被覆資材:バイオバオ(保温・防虫)
3. 粘着テープ(有害虫の密度減少)
4. フェロモントラップ(交信検知)
5. 緑肥作物(対抗作物)
6. 簡易分析機による土壌分析 (Drノールを使用する生産者たち)

特定の品目に偏らない作付をし、輪作体系を重視する。

施設設計が済みの場合	
山梨県産有機6-6-3	100kg
有機石灰	20kg
必清草炭(産土等)	40kg
生糞堆肥	2-3t

圃場1	圃場2
里芋	きつねん芋
圃場3	圃場4
アスパラ	人参

次年度

圃場1	圃場2
緑肥(スルメ)	大根
圃場3	圃場4
アスパラ	里芋

バイオマスのちから+畜産のちから+有機農業のちから=地域の力「∞」

参考資料 里なび研修会in千葉 (農)さんぶ野菜ネットワーク 富谷亜喜博